

舞鶴市政だより

第 1000 号
所 所 課
行 役 聴
市 市 聴
舞 鶴 市
報 報 報

◆この部分は、第1号当時の
の広報紙を再現していま
す。見慣れない漢字は「旧
字体」と呼ばれるもので、
この部分に限り、第1号を
再現するために使用して
います。

味。広報は市の取り組みを
お知らせするだけでなく、
背景にある思いや理由を
知ってもらふこと、それ
に對してのご意見をいただ
き、市政に反映させていく
ことを役割としています。

さまざまな事業や取り組
みを紹介している広報ま
いづるですが、今回は「広報ま
いづる」そのものがテーマで
す。紙面に込められた工夫や
69年間の歴史、そしてこれか
らの広報まいづるの向かう
先をご紹介します。

味。広報は市の取り組みを
お知らせするだけでなく、
背景にある思いや理由を
知ってもらふこと、それ
に對してのご意見をいただ
き、市政に反映させていく
ことを役割としています。

「広報まいづる」が創刊
1000号を迎えました。
1950(昭和25)年の発行
から69年。作り手の思いは
変わらず、市民の皆さんに
「舞鶴市はどのような方針
で、どのようなまちづくり
を進めていくのか」を知っ
てもらい、そのうえで市民
の皆さんからいただいた意

見を市政に反映させていく
という一貫した思いで広報
紙を作成、毎月市民の皆さん
へお届けしています。
今回は、広報まいづるが
歩んできた1000回の道
のりを振り返り、市民の皆
さんに読んでいただくため
の工夫や取り組みを紹介し
ます。

「広報まいづる」が創刊
1000号を迎えました。
1950(昭和25)年の発行
から69年。作り手の思いは
変わらず、市民の皆さんに
「舞鶴市はどのような方針
で、どのようなまちづくり
を進めていくのか」を知っ
てもらい、そのうえで市民
の皆さんからいただいた意

「広報まいづる」が創刊
1000号を迎えました。
1950(昭和25)年の発行
から69年。作り手の思いは
変わらず、市民の皆さんに
「舞鶴市はどのような方針
で、どのようなまちづくり
を進めていくのか」を知っ
てもらい、そのうえで市民
の皆さんからいただいた意

「広報まいづる」が創刊
1000号を迎えました。
1950(昭和25)年の発行
から69年。作り手の思いは
変わらず、市民の皆さんに
「舞鶴市はどのような方針
で、どのようなまちづくり
を進めていくのか」を知っ
てもらい、そのうえで市民
の皆さんからいただいた意

「広報まいづる」が創刊
1000号を迎えました。
1950(昭和25)年の発行
から69年。作り手の思いは
変わらず、市民の皆さんに
「舞鶴市はどのような方針
で、どのようなまちづくり
を進めていくのか」を知っ
てもらい、そのうえで市民
の皆さんからいただいた意

1950年
創刊号「1950(昭和25年4月)



広報まいづるの創刊。名前は「舞鶴市政だより」でした。A3より少し小さい約26センチ×38センチで両面2ページ。定価5円で販売していました。現在の価格で1000円で印刷されています。2年後、25号から全戸配布に変わりました。

1980年
第343号「1981(昭和56)年6月



1970〜80年代ごろからは新聞風の見え方から徐々に独自のデザインへと進化を遂げていきます。

2000年
第845号「2010(平成22)年1月



1990年代から平成にかけて、紙面がフルカラー化したほか、原稿を印刷業者に渡していただくのを、平成8年10月からデザイン・レイアウトも広報広聴課内で行うようになり、デザイン面でもさまざまな工夫ができるようになりました。

時代ごとの特徴

1950年「舞鶴市政だより」が創刊。広報紙の発行が始まりました。見た目は新聞そっくり。字がぎっしり詰まっているため、見出しは大きな文字で、記事の内容を簡潔に表しています。第3号からは写真も使われ始め、パソコンのない当時から、手書きの図表・グラフが用いられるなど、分かりやすさや読みやすさのために工夫が凝らされてきました。
写真や図表をより多く活用するなかで、新聞型のデザインにとらわれず、文章・図表・写真の配置の工夫

で一つのテーマを大きく取り上げる「特集」が次第に増えてきました。第343号は、全国的な米の消費量減少を背景に、お米を食べようと呼びかける特集を掲載。このほか、合成洗剤による水質汚染が社会問題だった時には、洗剤がなぜ水質を悪化させるのかや、港町舞鶴の水産資源へも悪影響があることを解説しつつ実際に泡立っている川の写真を掲載するなど、市民の皆さんに「なぜ協力をお願いしているのかを説明し、ご理解いただく」ための特集記事に取り組んできました。
平成に入りパソコンが普及すると、業者が行っていた紙面の編集・作成も職員が行うようになり、紙面のフルカラー化と合わせて、魅力的な紙面づくりにさらに力を入れました。テレビやインターネットなど紙以外のメディアが普及するなかでも、手に取って目を通してもらうために、分かりやすさと合わせて、見るだけでもどんな内容か分かるよう大きな写真をたくさん使った紙面を作る方針が強まりました。
第845号の特集は、子育て支援に関する内容です。核家族化や共働きなど子育て環境が変化するなかで、子育て世帯の皆さんの役に立つ情報や市と共に子育て支援に取り組む地域の活動を紹介します。このように、最近では元気に活動する地域の取り組みも積極的に紹介しています。

広報って何？ 関係づくりのための発信

広報まいづるの役割

市の広報紙だからお伝えできること



▲特に被害の大きかった昭和28年と平成16年の台風

市の取り組みや市政の方針などのほか、広報紙が担っている大切な役割の一つに、災害状況のお知らせがあります。災害時には、外出や移動そのものが困難で、身の回り以外の状況が分からないことがほとんど。また、テレビや新聞では、被害の大きい地域の様子は見られても、市内全域を広く取材するには限界があります。

市広報紙では、市内各地の住民の皆さんから写真提供をいただいたり、市内各地に出動する消防や土木、農林など各部署からの現場写真も活用して災害状況を伝えています。

3度変わった名前と題字のデザイン



A4冊子化以降は広報紙の「顔」といえば表紙ですが、昔は題字がどの発行物かを表す顔の役割を果たしていました。①が第1・2号、②が第3～36号、③が第37～248号で、249号から現在と同じ④「広報まいづる」となりました。中でも、③の期間にはたびたび題字のデザインが変わっており、パソコンのない時代、手描きで作られた題字には、線のブレやかすれなど、手作りの温かみを感じられます。



▲広報紙の名前が変わったのは3回ですが、題字のデザインは度々変更されています

69年の歴史 舞鶴市政だより 第1号

広報広聴課では、広報紙を第1号から保管しています。本などと異なり保存を意図していない紙質のため劣化が激しく、69年の歳月を物語っています。一方、右ページに掲載の昭和28年の災害特集号は、記録・保存のためか丈夫な紙質で他の号より良い状態を保っています(展示などは行っていません)。



▲舞鶴市政だより第1号

過去の広報まいづるを公開中

広報まいづるは、第1～360号が縮刷版、第361～970号が製本版、第971号以降が原本の状態公開。市政情報コーナーや東・西図書館で閲覧できます。

